

ほんばこ



No. **54**

日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第54号（通巻第70号）

2017年12月7日発行

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-6-2

日本教育会館5F

教育図書館

Tel/Fax : 03 (3230) 4437

Mail : toshokan32304437@jec.or.jp

<http://www.jec.or.jp/tosho/>

● 目 次 ●

- ・「ねえ、どっちがいい？」 内海 早苗 2～3p
- ・《 図 書 紹 介 》
『歴史教科書の日米欧比較』 筑波書房（2017/7/25）
紹介者・著者 薄井 寛 4～5p
- ・最近の受入図書（2017年8月～2017年11月受入） 6～7p
- ・教育図書館のご案内 8p

「ねえ、どっちがいい？」

内海 早苗

読むと必ず元気になる本があります。正確に言うと、子どもたちに読んで聞かせていると、読んでいる自分が元気をもらう作品です。

ジョン・バーミンガムさく
まつかわまゆみやく
『ねえ、どれがいい？』（評論社）



こんな風に始まります。

「もしかだよ。きみんちの まわりが かわるとしたら、大水と大雪とジャングルと、ねえ、どれがいい？」

「ぞうに おふろの おゆを のまれちゃう、たかに ごはんを 食べられちゃう、ぶたに ずぼんをはかれちゃう、かばに ふとんを とられちゃうとしたら、ねえ、どれがいい？」と続きます。

「どれを手つだう？ ようせいのまほう、小人のたからさがし、まものの いたずら、ま女の シチューづくり、サンタクロースの プレゼントくばり。」…

頭の固い大人にとっては、なかなかの難問も、子どもたちにはとても大ウケで、この後も、さまざまなシチュエーションの問いが続きます。普段は話を聞いていなかったり、おしゃべりばかりしていたりする子どもたちが、目を輝かせて聞いている、読み聞かせをする度にこの作品の持つ力に、私自身が大きな魅力を感じていました。

「ねえ、どれがいい？」

実際の学校生活では、子どもたち一人ひとりがその意思を問われる場面はあまりないように思います。

「今日の1時間目は、算数がいい？それとも社会がいい？」とか、「午後からはどこで学習したい？」とかになると、授業がそもそもなりたちません。「制服は、スカートかズボンか、どっちがいい？」という「問い」はあってもいいと思うのですが、今までの学校は文化の中に、「子どもが主体的に選ぶ」ことを組み込んできませんでした。「子どもの言い分ばかりを聞いているとわがままになる。」という言葉さえ、聞こえてくることがあります。（ちなみに、日本も批准している子どもの権利条約には「子どもは、自分に関係のあることについて自由に自分の意見を表す権利をもっている。その意見は、子どもの発達に応じて、じゅうぶん考慮されなければならない。」と「参加する権利」を規定しています。）

学校関係者の間でも、子どもの「参加する権利」についての議論は十分にあったとは言えず、これまではどちらかと言えば子どもの意思はあまり重要視されてこなかったように思います。

しかし、この度グローバル化する国際社会において継続的に学習し問題解決能力の高い子どもの育成をめざすとし、学習指導要領に「主体的で対

話的で深い学び」が書き込まれました。以降学校教育でとりくむことになります。ここで言う「主体的で対話的で深い学び」とはそもそもどういうものなのでしょうか？

「総合的な学習」が始まった頃の、子どもにまつわる印象深い思い出がもう一つあります。教材は、学校のすぐそばを流れる川でした。子どもにとって、身近にあるけど特に興味はない、橋の上からつばを吐いてもなんとも思わない、そんな存在の川でした。しかし、ゴミがそこらに落ちているその川にも魚がいること、その場所は元々川ではなく、元の川が曲がりくねってよく決壊することから今の場所に川が作られたということなどが次つぎとわかってくると、その川の環境をなんとかしたいと子どもたちの学ぶ姿勢が変わりました。「なぜ」を見つけ、解決する方法を考える「ゆとり」のある学習であれば、子どもは主体的にとっても楽しく学ぶものであることを実感した経験でした。

暉峻淑子さんの『対話する社会へ』（岩波新書）は、わたしたち人にとっての「対話」が何であるのか、何をもちがつかについて述べられた著書です。「対話は、基本的に1対1の対等な人間関係の中で、相互に応答する個人的な話し合いである」「互いにとって自然な発見があり、大きな視野が開け、考える内容も深くなる」としています。また、赤ちゃんに大人が話しかけ言葉を獲得する意味を、人間にとって対話が根源的なことであることを示すと説明しています。「話す」と「聞いてもらう」という相互関係が存在の肯定につながるということです。

日常を振り返ってみて、わたしたちの身の回り

には「対話」はあるのでしょうか？「対話」だと見えるけど実は一方的な「事務連絡」であることもしばしばあります。「～らしさ」が重要視される慣習があったり、本人もそれにしばられていたりするからかもわかりません。どちらかと言うと「空気を読む」ことが求められて、個人的な見解を述べる機会が少ないように感じます。

「多面的・批判的に物事を見る」「ナチスの反省だけでなく、よき社会人、よき地球人を育てることを教育の目的」に置いているドイツの教育との違いにもふれ、職員会議が否定され、教員同士が悩みを相談する場がなくなりつつある今の日本の学校の対話の喪失への危機感にもふれられています。教員が上下関係で管理・監督されるようになると、子どもに対しても同じ関係になるのではないかということです。

「戦争」の反対は「平和」ではなく「対話」であり、今進む上位下達の忖度社会を乗り越えて、民主主義の社会を発展させる、学校が「再生の場」になる「希望」についても言及されています。そう意味では、問われているのは、学校関係者を含むすべての大人であると言えるのではないのでしょうか。

「国が望むように戦争をする国になる、それとも一人ひとりが自由にものを申せる民主主義の国を続ける、ねえ、どっちがいい？」

（日本教職員組合 女性部長）

教育図書館について

教育図書館は1966年10月1日、（財）日本教育会館の附設図書館として設立されました。教育関係図書を中心に、日本教職員組合結成以来の刊行物、全国教研集会報告書などのほか、国民教育文化総合研究所（略称教育総研、前身は国民教育研究所）の研究成果、教育学一般、教育実践記録などを重点的に収集、閲覧に供しています。

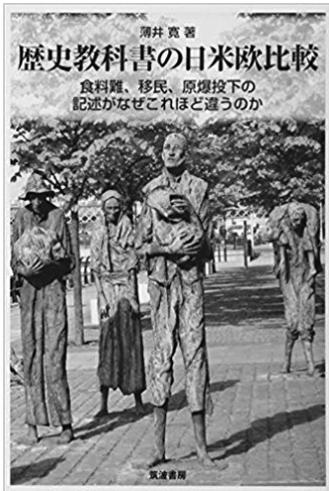
《 図 書 紹 介 》

『歴史教科書の日米欧比較』

—食料難、移民、原爆投下の記述が
なぜこれほど違うのか—

薄井寛著

筑波書房 (2017/7/25)



1990年代の終わり頃、『20世紀』と題するイギリスの高校歴史教科書に目を通す機会があり、次の記述に目がとまった。「満州には日本の工業に有益な資源がある。増え続ける人口のための土地が存在する。……（深刻化する国内の問題を解決するため、）多くの日本軍幹部は自分たちで行動を起こすしかないと決断した」。日本の高校教科書は満州事変をどう書いているのか。何冊かを調べてみても、人口増や資源収奪に関する記述は見当たらず、イギリスとの違いに驚かされた。これが、日米欧諸国の歴史教科書の比較研究に取り組むきっかけであった。

調査の範囲を広げるにつれ、日米欧の教科書の違いがいっそう見えてくる。違いの背景に何があるのか。その解を求めるため、2014年5月、ドイツの国際教科書研究所を訪れ、同図書館に5週間ほど通った。それは、欧米諸国の歴史教科書の変遷を調べ、国際比較に必要な共通項を探す旅でも

あった。支配者の勃興や革命の歴史では共通項になりえない。それなら、人びとの歴史のなかに、各国の教科書の違いを浮き彫りにする切り口を見つけられないか。模索の結果は、戦中・戦後の食料難と移民送出という二つの共通項。それらは二つの疑問でもあった。

欧州諸国の教科書が食料難と移民の歴史を詳述する一方、なぜ日本の教科書は食料難の歴史を略述し、移民の歴史を無視するのか。先人たちの苦難を今の青少年へ語り継ぐことに、欧州諸国は教育的価値を見出し、なぜ日本は軽視するのか。これらの疑問は同時に、時の支配者にだまされ塗炭の苦しみを強いられた人びとの歴史が日本の教科書のなかで薄められ、消されてきたのではないか、という強い疑念へ転じることとなった。

戦争の悲惨さを想起させる食料難の記述

第一章は、戦中・戦後の食料難に関する日英独の教科書の記述を比較しながら、3カ国の戦時食料体制の構築と結末を振り返る。そこでは、第一次大戦の敗北をドイツにもたらした「飢餓の冬」や、第二次大戦の独ソ戦におけるナチスの食料収奪計画の失敗が、「ユダヤ人問題の最終的解決」へつながった経過などに着目した。

一方、主食の米不足を植民地米や輸入米に依存したまま、備蓄の積み増しもせず日米開戦に踏み切った日本。アメリカ軍の兵糧攻めで銃後の社会は深刻な飢餓に襲われ、敗戦後には餓死者を出すほどの食料危機に陥ってアメリカの食料援助にすがらしかなくなった。

独英両国の教科書は、戦争の悲惨さを想起させる情報として、食料難の実態を多くの資料を使って詳述する。一方、日本の教科書は、1990年代の終わり頃からその記述を簡略化させ、人びとの窮乏を示す写真の掲載も減らしてきた。そこには、

「戦争を暗く書いてはならない」とする、GHQの教科書検閲を引き継いだ政府の教科書検定に比べ、飽食をあおる風潮が影響したのだ。ドイツには、「ハムスターの旅」（戦後の買い出し）の節まで設ける教科書があるのとは対照的に、「タケノコ生活」の言葉は2014年度使用の『日本史B』19点から消えている。

不都合な歴史的事象をそぎ落とす教科書

第二章では、移民の歴史に関する記述を比較した。迫害と競争の移民史を解説するアメリカの教科書は、非白人の移民禁止や南欧等からの移民制限を定めた1924年移民法（排日移民法）を詳述する。他方、多くの『日本史B』は、貧民対策と外貨獲得のために奨励されたハワイ・アメリカ等への移民から、関東軍が推進した「満州農業移民百万戸移住計画」や「満蒙開拓青少年義勇軍」の送出、その結果としての中国残留孤児問題へ至る自国の移民史を、ほとんど記述しない。権力者にとって不都合な事象が日本の歴史教科書からそぎ落とされてきたのだ。

その実態は、対日原爆投下の記述に焦点を当てた第三章で鮮明となる。亡命ユダヤ人の科学者がナチスせん滅のために主導した原爆製造の経過から、同投下に対する賛否両論の国内議論に、アメリカの教科書が数頁を割く一方で、『日本史B』は本文5～6行で原爆投下を解説し、脚注・写真で補足する。日本では、なぜこれほどの極端な略述で済まされてきたのか。

最後の第四章は、安上りの文教政策に起因する歴史教科書の課題を検討した。安上りの程度は、小中学校教員に対する支援態勢の日米間の格差のみならず、教科書の情報量と定価を比べれば歴然となる。教科書購入予算の長期にわたる抑制策のもとで、『日本史B』の定価（825円）は今や、本文だけで千頁を超えるアメリカの教科書の

25分の1ほど。ドイツなどの教科書と比べても、掲載資料の質と量の差は大きすぎる。文科省はアクティブ・ラーニングの導入を打ち出すが、教科書の基本的な枠組みはそのままだ。これでは、生徒のディベートに役立つ資料準備など、教員の負荷が増えてしまう。

歴史教科書の戦後は終わっていない

廉価な教科書は、不都合な歴史を省略するような教育には好都合だが、二度とだまされないために歴史を批判的に問い直し、過去から学び、将来へ備える能力を育むような歴史教育を望む国民の期待には、応えるものでない。支配者の政策展開を中心に覚え込むではなく、その政策による人びとへの影響や民衆の対応など、人びとを中心にすえた歴史の展開について生徒たちが多様な情報を共有し、考えを深め合い、今をみつめる。今後は、それを可能とするような教科書の改革が求められてくるのではないか。

議会政治の父と呼ばれた尾崎行雄はその著『民主政治読本』（1947年）のなかで、「日本国憲法は、（戦争での犠牲という高い代償を払って）やっと手に入れた宝」だと述べたが、その意味では、米国教育使節団の報告書（46年）も同じだ。教育基本法や学校体系の改革、PTAの創設など、使節団の勧告はほとんど実現したが、教科書出版の自由化提言だけはお蔵入り。歴史教科書の戦後はいまだ終わっていないのだ。多くの途上国とほぼ同水準の教科書制度に留まっているようでは、教育の国際化どころでないだろう。支配者のための歴史教科書ではなく、私たちのための歴史教科書の実現に向けた議論にとって、拙稿が一つの素材になることを願いたい。

著者 薄井 寛（エッセイスト）

著者である薄井様にご紹介をお願いしました。

最近の受入図書

(2017年7月～2017年11月受入)

【日教組刊行物】

『日教組政策制度要求と提言』2017～2018年度版
日本教職員組合編・発行

『2014年ものづくり教育シンポジウム』VOL. 4

日本教職員組合ほか編・発行 2015. 3

【教育総研刊行物】

『季刊フォーラム教育と文化』88号 (2017 Summer)

教育文化総合研究所編 (株)アドバンテージサー
バー 2017. 7

【文部科学省刊行物】

『文部科学白書』平成28年度 文部科学省著 株式
会社 白橋 2017. 3

『諸外国の初等中等教育』第128集 文部科学省編
日経印刷 2017. 7

『諸外国の教育動向 2016年度版』文部科学省著
明石書店 2017. 9

【平和資料】

『海なお深く』全日本海員組合編 全日本海員福祉
センター 2017. 7

『知らなかった、ぼくらの戦争』アーサー・ビナー
ド編著 小学館 2017. 4

『戦争をよむ』中川成美著 岩波書店 2017. 7

『沖縄戦と平和ガイド』糸数慶子著 資料センター
本郷 2008. 9

『沖縄戦と原爆投下』中沢啓治、池田理代子、川崎
のぼる、水木しげる、福本和也、梅本さちお、比
嘉滙著 金の星社 2017. 2

『語り遺す戦場のリアル』共同通信「戦争証言」取
材班編 岩波書店 2016. 7

『沖縄の戦争遺跡』吉浜忍著 吉川弘文館 2017. 7

『忘却の引揚げ史』下川正晴著 弦書房 2017. 08

【和雑誌】

『教育委員会月報』平成29年7月号～平成29年10月
号 第一法規

『水平新聞 復刻版』第1号 (1924. 6) ～第23号
(1937. 2) ほか 全国水平社連盟本部編 木村京
太郎解説 株式会社 世界文庫

【防災・減災】

『命を守る水害読本』命を守る水害読本編集委員会
編 毎日新聞出版 2017. 7

【社会・教育】

『授業づくりで子どもが伸びる、教師が育つ、学校
が変わる』石井順治編著、小畑公志郎、佐藤雅彰
著 明石書店 2017. 7

『データで読む教育の論点』舞田敏彦著 晶文社
2017. 8

『はじめての子ども教育原理』福元真由美編 有斐
閣 2017. 7

『教育とは何?』尾木直樹、茂木健一郎著 中央公
論新社 2017. 9

『「天才」は学校で育たない』汐見稔幸著 ポプラ
社 2017. 1

『神奈川の在日外国人教育の記録～高校編』第1期
(1970年～1990年) 神奈川の在日外国人教育を記
録する会編 一般財団法人 神奈川県高等学校教
育会館 2017. 3

『最新版 秋田県式家庭学習ノート』主婦の友社編
主婦の友社 2017. 6

『ビジュアル 数学全史』クリフォード・ピッツク
オーバー著 根上生也、水原文訳 岩波書店
2017. 7

『子ども格差の経済学』橋木俊詔著 東洋経済新報
社 2017. 8

『オックスフォードからの警鐘』荻谷剛彦著 中央
公論新社 2017. 7

『戦後夜間中学校の歴史』 大多和雅絵著 六花出版
2017.6

『事務職員の職務が「従事する」から「つかさどる」
へ』 藤原文雄編著 学事出版 2017.8

『教育勅語の何が問題か』 教育史学会編 岩波書店
2017.1

『グローバル化時代の人権のために』 御子柴義之、
舟場保之、寺田俊郎共編 上智大学出版 2017.4

『「日米指揮権密約」の研究』 末浪靖司著・文・そ
の他 創元社 2017.1

『戦争と農業』 藤原辰史著 集英社 2017.1

『知ってはいけない 隠された日本支配の構造』 矢
部宏治著 講談社2017.7

『高校生が感動した確率・統計の授業』 山本俊郎著
PHP研究所 2017.9

『重力波で見える宇宙のはじまり』 ピエール・ビネ
トリュイ著、安東正樹監訳、岡田好恵訳 講談社
2017.8

『これからの日本、これからの教育』 前川喜平、寺
脇研著 筑摩書房 2017.11

『クルマを捨ててこそ地方は蘇る』 藤井聡著 PH
P研究所 2017.1

『結婚差別の社会学』 齋藤直子著 勁草書房2017.5

『あなたの悩みにおこたえしましょう』 信田さよ子
著 朝日新聞出版 2017.11

『新聞記者』 望月衣塑子著 KADOKAWA
2017.1

『部活があぶない』 島沢優子著 講談社 2017.6

『5時に帰るドイツ人、5時から頑張る日本人』 熊
谷徹著 2017.1

『東芝原子力敗戦』 大西康之著 文藝春秋 2017.6

『レールの向こう』 大城立裕著 新潮社 2015.8

『木村草太の憲法の新手』 木村草太著 沖縄タイム
ス社 2017.3

『路地の子』 上原善広著 新潮社 2017.8

『ネパールの人身売買サイバーの当事者団体から
学ぶ』 田中雅子著 上智大学出版 2017.5

『テンプル・グランディン』 サイ・モンゴメリー著
杉本詠美訳 汐文社 2016.1

『未来の年表』 河合雅司著 講談社 2017.6

『終わらないフェミニズム』 日本ヴァージニア・ウ
ルフ協会、河野真太郎、麻生えりか、秦邦生ほか
編 研究社 2017.1

『最悪の事故が起こるまで人は何をしていたのか』
ジェームズ・R・チャイルズ著、高橋健次訳 草
思社 2017.8

『私の中のわたしたち』 オルガ・R・トゥルヒーヨ
著 伊藤淑子訳 国書刊行会 2017.9

【家庭・芸術・趣味・文学一般 ほか】

『漫画 君たちはどう生きるか』 吉野源三郎原作、
羽賀翔一漫画 マガジンハウス 2017.11

『男尊女子』 酒井順子著 集英社 2017.5

『女の子が生きていくときに、覚えていてほしい
こと』 西原理恵子著 KADOKAWA 2017.7

『わたしを離さないで』 カズオ・イシグロ著 土屋
政雄訳 早川書房 2016.2

『かがみの孤城』 辻村深月著 ポプラ社 2017.6

『その食べ物、偽物です！』 ラリー・オルムステッ
ド著、依田光江訳 早川書房 2017.7

『影裏』 沼田真佑著 文藝春秋 2017.7

『孤独のすすめ』 五木寛之著 中央公論新社 2017.7

編集後記

「主体的で対話的で深い学び」とは？「対話」
の大切さ。自由な発言ができる社会でありたい
と感じます。

今回の図書紹介は、当館を利用され、寄贈い
ただいた著者である薄井様に、調べるきっかけ
となった思いなどを中心に寄稿していただきま
した。教育の中で何を教えていくべきなのか、
生きていくうえで欠かせない食料問題と歴史、
広く考える素材にさせていただけたらと思います。

内海様、薄井様に感謝申し上げます。（川内）

教育図書館案内

- * 開館時間：10：00 ～ 16：30
- * 休館日：土曜・日曜日、国民の祝日、夏期及び年末年始の休館日、臨時休館日
- * 蔵書の貸出
貸出冊数：5冊／貸出期間：3週間
館外貸出には、利用者登録が必要です。
(ご自宅住所が確認できる身分証明書をお持ち下さい。受付で貸出カードを発行します。)
- * 返却方法
開館中 カウンター受付へ
閉館時 「ブック・ポスト」をご利用下さい。
設置場所：5F 図書館入口前
- * レファレンス・サービス
当館所蔵の図書・雑誌、その他教育に関するお問い合わせに対応しています。
- * コピーサービス
(白黒1枚10円／カラー30円)

特別コーナー

- 平和資料コーナー：
反核（原発関連を含む）・平和運動、平和教育教材、平和教育実践記録、戦争体験記など
- 日教組刊行物コーナー：
日教組教育新聞・雑誌（「教育評論」「月刊JTU」など）、教育政策、教育課程、教科書問題、各部の図書・資料など
- 教育総研刊行物コーナー：
年報、理論講座、ブックレット、季刊「教育と文化」、各研究委員会報告書など このほか旧国民教育研究所時代のあらゆる刊行物も含む
- 日教組教研全国集会報告書・県教研のまとめ
- 都道府県・高教組史誌、同機関誌
- 文部科学省統計調査報告書・刊行物：
学校基本調査、国際比較、教育費、学習指導

要領、指導書など

- 海老原治善文庫：元東京学芸大学教授、教育総研初代所長海老原治善氏からの寄贈書
- 鈴木喜代春文庫：児童文学者、元教育相談室相談員鈴木喜代春氏の著作本、寄贈書

蔵書の特徴

- 教育関係図書を中心に和書、和雑誌・新聞・洋書、洋雑誌などを収蔵しています。
- 2017年4月現在約66,800冊になります。
- 教育図書館のホームページの蔵書検索の画面から検索できます。
(<https://ilisod001.apsel.jp/kyoikutoshokan.lib/wopc/pages/TopPage.jsp>)
- 千代田区立図書館のホームページ「大学・専門図書館横断検索」からも教育図書館の蔵書が検索できます。

交通案内

- 神保町駅 A1出口より徒歩3分
- 九段下駅 6番出口より徒歩7分
- 竹橋駅 1b出口より徒歩5分
- 水道橋駅西口 徒歩12分（JR総武線）

